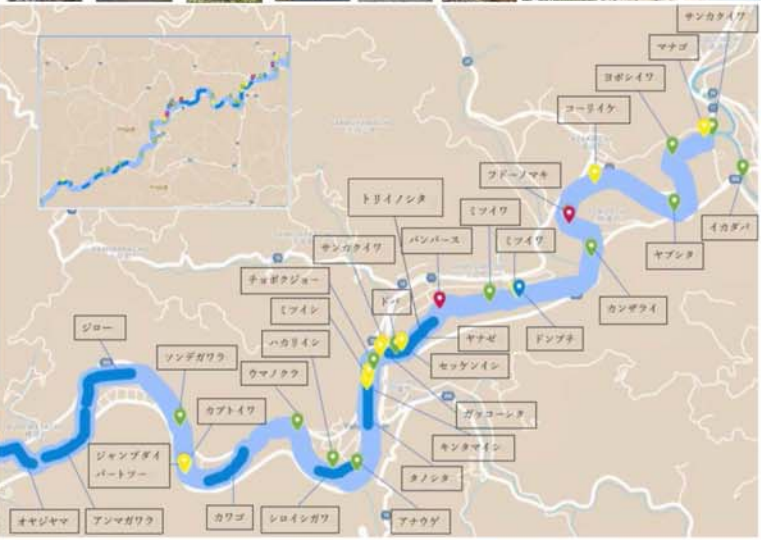


# 愛知県豊田市旭地区矢作川上流域における川の部分呼称に関する調査・研究

**目的:** 本研究は、愛知県豊田市旭地区(旧東加茂郡旭町)を貫流する矢作川の部分呼称(微細地名)に関する調査・研究である。微細地名は、地図に記載されることは稀であるが、地域社会の暮らしの中で用いられてきた、いわば「文化遺産」である。急速に失われつつある呼称を記録し、その命名法の解明を目的とした。

矢作川は、中央アルプス南端の長野県下伊那郡大川入山を源とし、愛知・岐阜県境の山間部を流れ、三河湾に注いでいる。このうち、矢作川上流域の豊田市旭地区流域を調査対象とした。旭地区は矢作川を中心に発展してきた町である。現在、上流に矢作ダム、矢作第2ダム、下流には笹戸ダム(堰)ダムがある。対象流域は、河川改修や護岸工事、観光施設の設置がなされているが、旧来の川のすがたを残している地域である。

**方法:** 調査は、2018.8.24~2018.26に面接による聞き取り調査を実施し、補充調査を2018.12.9に実施した。インフォーマントは、原則として60歳以上のネイティブとした。結果、地域生活の文化遺産としての**矢作川上流域における川の部分呼称として、微細地名77事象を採集・記録**できた。これらを地図上に示し、造語法・命名法の観点から分析し、分類・整理する。



矢作川上流域の川の部分呼称一覧(五十音順)

- |                 |                  |                 |
|-----------------|------------------|-----------------|
| アシガセ(葦ヶ瀬)       | コタキド(小滝戸)        | ハカリイシ(計り石)      |
| アナウゲ(穴釜)        | コトブキバシ(寿橋)       | ハツデンシヨシタ(発電所の下) |
| アリヒラバシ(有平橋)     | コワタシ(小渡し)        | ハッピーオーダ(八徳田)    |
| アンマガワラ(有間河原)    | サカイザワ(境沢)        | ハリガセ(針ヶ瀬)       |
| イカダガエシ(筏漕し)     | サンカクイワ(三角岩)      | パンパース           |
| イカダガエリ(筏漕り)     | ジゴクダニ(地獄谷)       | フタツイシ(二つ石)      |
| イカダバ(筏場)        | ジャンプダイ(jump台)    | フドーノマキ(不動の巻)    |
| イワクラバシ(岩倉橋)     | ジャンプダイパートゥー      | フナバ(船場)         |
| ウツナセ            | (jump台 part two) | マナゴ(真砂)         |
| ウマノクラ(馬の鞍)      | シラナミノセ(白波の瀬)     | ミゾオチ(水落ち)       |
| エボシイワ(烏帽子岩)     | シロイシガワ(白石川)      | ミタケノフチ(見竹の淵)    |
| ヨボシイワ(烏帽子岩)     | ジロー(次郎)          | ミツイシ(三つ石)       |
| オーイシ(大石)        | スイジン・〜イワ(水神岩)    | ミツイワ(三つ岩)       |
| オーイデ(大井戸)       | スベリダイ(滑り台)       | ムツアライバ(襦袢洗い場)   |
| オーセ(大瀬)         | スリパチ(掃り鉢)        | ヤシタ(屋下)         |
| オーヤナ(大梁)        | セツケンイシ(石鯨石)      | ヤナゼ(梁瀬)         |
| オドヤナ(小渡梁)       | ソンデガワラ(側河原)      | ヤナギシタ(柳下)       |
| オニモドシ(鬼戻し)      | ダイオーセ(大瀬)        | ヤナダイラ(梁だら)      |
| オヤジイワ(親父岩)      | タスキイワ(樽岩)        | ヤブシタ(藪下)        |
| ガッコウシタ(学校下)     | タノシタ(田の下)        | リョウコクバシ(両国橋)    |
| カブトイワ(兜岩)       | チョボクジョウ(貯木場)     | ワクノウラ(湧の浦)      |
| カメイシ(亀石)        | デアイ(出合)          | ワキノウラ(湧の浦)      |
| カワゴ(かわご「魚名」)    | ドーズキダム(百月ダム)     |                 |
| カワグチヤナ(川口梁)     | トリイシガワ(鳥居の下)     |                 |
| カンザライ(寒ざらい)     | ドバ(土場)           |                 |
| キンタマイシ・〜イワ(金玉石) | トンビイワ(鷹岩)        |                 |
| コーリイケ(氷池)       | ドンブチ(どん淵)        |                 |

**造語法:** 語構成の観点から、後部要素に注目すると、〜セ(瀬)、〜タキ(滝)、〜サワ(沢)、〜フチ(淵)、〜ウラ(浦)、〜カワラ(河原)、〜イケ(池)など、川の流れる状態や形状を表すものが特徴的である。タキはせよりも流れの急な危険なものである。なお、トロ(瀬)はフチよりも流れが弱いところ、〜ト(戸)は、筏を下る際の川の狭い所を指す。中州のことは、シマ(島)と呼び、大きなシマでは畑を作した。川外部の目標物との位置関係で表すものとして、〜シタ(下)が用いられる。川内部の目標物としては、石・岩に注目した、〜イシ(石)、〜イワ(石)が多い。前部要素に注目すると、形状、大小、状態、利用目的、目立つ自然物や建築物、小字名などが用いられ、それらが直接的にあるいは、例えば、トンビ(鷹)イワ、カメ(亀)イシ、カブト(兜)イワのように比喩的に表現されている。

**造語視点** 流域のすべてが名付けられているわけではない。廃語の結果、空白になった所もあるが、基本的には何らかの必要性があって、その地点や一定範囲への命名がなされるため、命名される流域地点には、当然ながら粗密がある。本調査で確認した77事象は、主たる使用者との用途の観点から捉えると、「筏師」「釣り人」「川遊び」「日常生活」の4つの視点のものに見分けられる。ただし、相互に共有されることもある。

(1) 筏師: 往時に矢作川周辺の山林から材木を切り出し、筏で下流へと流す仕事に携わった筏師視点の呼称。視覚情報が深く関わっていることに特徴がある。「サンカクイワ」や「ウマノクラ」のように、石や岩の形や模様への着目、「オニモドシ」「ジゴクダニ」のように、川の危険な箇所の比喩的表現。安全な川下りを確保するために、直感的に視認できる呼称となっている。また、水量を計るための「ハカリイシ」「ミズハカリ」がある。筏流しにおいて、危険な部分に注意喚起するために目印として、その地点に名前を付けられる傾向があった。

(2) 魚釣り: 娯楽としても行なわれる魚釣りをする人々の視点の呼称。「シロイシガワ」は、「白い石がある川」という認識が呼称に反映されている。川の流れが急な〜セ(瀬)は、鮎釣りの好ポイントであり、「ハリガセ」「シラナミノセ」のように呼称に用いられている。また、鮎の友釣りでは、川の流れ内部につけられた部分呼称が多い。往時の漁法が廃れたのに対して、鮎釣りは観光業の一つとして盛んであり、呼称は域外の釣り人にも伝承される可能性が高い。

(3) 川遊び: 川で遊んでいた人々(子ども)の視点の呼称。単純でユーモアがある。「セツケンイシ」「キンタマイシ」は、その滑らかな触感。「ジャンプダイ」「スベリダイ」は、その遊び方からの命名である。また、「タスキイワ」は「スベリダイ」と再命名されている。川遊び視点では楽しめるもの名前が多く、子ども視線の名付けがある。

(4) 日常生活: 流域住民の生活の視点による呼称。流域地域社会の生活に密着した呼称である。「オーイシ」「スイジンイワ」には神が宿り、流行りへの霊験、水の恵み、川で遊ぶ子どもを守る。また、オムツを洗う「ムツアライバ」や廃棄場所の「パンパース」は、高齢の方のみで得られた。ここに属する特有の呼称自体は少ないが、他の視点との共有率は高い。川と集落との位置関係において、近接した狭域の地点に対する命名であった。

**おわりに** 呼称は聴取したが、どの地点か不明なものがある。再調査が必要である。得られた呼称の中には、ダムの設置や自然災害、河川改修工事などによって、地形や状態が変化してしまったものもある。また、川外部の目印とされた建築物や自然物がなくなったものもある。呼称には、地名としての本来の指示機能だけでなく、往時のすがたを言葉の記憶として残す機能もある。実際に呼称は知っていても、その場所は知らないという話者も多かった。盛んであった筏流しは既になくなり、川漁は観光の鮎釣りや観光梁になり、魚とりや川遊びは、流域の子どもにとっての日常の遊びではなくなった。流域の人々にとって、眼下に流れる矢作川は依然として大切な川であることには変わりはないが、川とのかかわり方に大きな変化が存するのである。

こうした中で、従来のなんらかの必要性によって生まれた呼称は、一部を除いて、まさに失われようとしている。矢作川流域の往時の暮らしの裡で造語されたこれらの呼称の多くは、人と川との関係が変化した現在、まさに消失する危機にある。